

サービslラーニングを通して

社会福祉学部社会福祉学科 2年 早川 悠理嘉

活動先：NPO 法人学童保育ざりがにクラブ

ゼミ：村上 徹也 先生

1. サービスラーニングを通して自分の成長や気づき

はじめに、私がサービスラーニングを選択したのは長期休みを使い現場体験をすることができるからである。学校の講義や自分で行う勉強とは違い、実際に職員と同じ仕事を体験することで、今まで学べなかった現場の状態や問題点を知ろうと考えたからである。ゼミにより活動できる場所が異なったが、東海市で学童保育をしている所に行ってきた。なぜ、学童保育にしたかという、普段から講義では高齢者や障害者について学ぶが、子どもについて学ぶ機会がとて少なかったこと、私の家周辺には子どもが少なく関わり方が分からなかったことからざりがにクラブに決めた。

ざりがにクラブでは共働き、母子父子家庭の子どもたちの放課後の生活を守ることで、親が安心して働けるような地域社会をつくることを目標に活動している。事前訪問から子どもたちは学生が来るのを楽しみにしていたらしくとても元気に出迎えてくれたので、初めての現場体験からの緊張はあったが、少しだけ気持ちが楽になり頑張ろうと思えた。

活動初日から一日中子どもたちとのふれあいが多く、普段から子どもとの交流がない私にとってはとても大きな刺激であった。活動の中で大変だと感じたのは、子どもたちとコミュニケーションをとることと注意することだった。初日から 25 人ほどの子どもが来ており、名前を覚えながら話したり、遊ぶことがなかなか難しく戸惑うことが多かった。また、施設には兄弟や姉妹が多いことから、よく名前や兄弟を間違えてしまうことが多かった。しかし、間違えるたびに子どもたちが名前や兄弟を教えてくれたので、覚えるのと同時に自然に会話に繋げることもできた。注意では、私は「危ないから駄目だよ」「やめなさい」などしか言えなく、どうして駄目なのかという理由を聞かれることが多かったことから、注意をすることはあまりしないで指導員に任せることが多かった。今だったらちゃんと伝えることができるのと思うこともあるが、その時に伝えることができなければ意味がない。悪いことをしたら注意するということは、子どもたちの将来にも関わってくる大切なことだと思うので、しっかりとなぜ駄目なのか理由を伝えられるようにしていなくてはならないと実感した。

ざりがにクラブでは、勉強時間・自由時間・けん玉検定・子どもランチ・プールなど、季節にあったイベントが予定されており、特にこどもたちはけん玉検定に力が入っていた。顔と名前を憶えてきたころに、子どもたちから一緒にけん玉をやろうと誘われ、学生も一緒になってけん玉をやることになった。けん玉の持ち方や分からない技を教えてもらうなど、けん玉という題材ができるので話すのがとても楽に感じた。けん玉をすることには昔の遊びを教えたいという職員たちの思いと、低学年と高学年が教え合って技を極めること

ができるので行っていると指導員教えてくれた。

活動中に日にちが経つにつれ子どもたちと打ち解けていき「遊ぼうよ」「抱っこ」「おんぶ」と言ってくれることが増えたことから、少しずつだが打ち解けているのだと感じられた。男の子からはゲームや鬼ごっこに誘ってくれることもあり、アニメのキャラクターカードについて話してくれることも増えた。女の子からはトランプや絵を描いてと頼まれたりした。遊んでいるときに何度か言い合いになってしまうこともあったが、指導員の力を借りどのように子どもが言いたいことを聞くのか、その場を落ち着かせることなど学ぶことができた。

2. 活動を通し見えた地域課題や社会活動

活動を通して見えた地域課題としては、地域との関わりが少なく、ざりがにクラブという狭い空間でしか活動ができていないことである。六日間という短い期間だが、活動をしてみて子どもたちの親とは会話することはあったが、住宅に囲まれている施設なのに周りに住んでいる人たちとの会話はあまり見られなかった。ざりがにクラブで預かることのできる年齢対象の子どもがいない家にとっては、あまり関わりがない場所になっているのかもしれないということと、子どもがいない家から見ると行きにくい場所になっているのではないかと考えた。なので、年齢に関係なく参加できるイベントをざりがにクラブが主体となって開催することで、ざりがにクラブという施設の宣伝もでき、NPO 法人というものはどういう活動をしているかを地域の人に知ってもらえることができる。

3. 自分自身、地域または社会の今後の課題や抱負

子どもとの関わりがあまりなかったため、初めは子どもたちが率直に自分の思ったことや気持ちを表すことに戸惑ってしまうことが多かった。また、「あっち行け」「うっとおしい」など相手が傷つくような言葉を平気で言うので、何度か自分の感情を抑えることができなくて言動に出てしまうことが多かったと感じている。この先、多くの人たちと関わる仕事に就くかもしれないことを考えると、自分の気持ちや感情はコントロールできるようにしなければならない。また、子どもたちは私たち学生を指導員と同じ大人として見ていたので、学生の私たちもいつまでも子どもではなく大人としての立ち振る舞いができるようにならなくてはいけないと感じた。